

二〇二一年度

問題冊子

国語	教 科
国語	科 目
14	ページ数

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 試験終了時には、解答用紙の1ページ目を表にし、机上に置くこと。解答用紙は、解答の有無にかかわらず回収する。
3. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

[1]

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

思想史家、藤田省三のエッセイを読んで、これはいかにも『富士日記』^{〔注1〕}と好対照をなしていると思ったことがある。「風俗の生産関係——遊園地にて」と題した短い作品で、『アサヒグラフ』の一九七八年十月六日号に載ったもの。その後『藤田省三著作集』第八巻(みすず書房、一九九八年)に収められている。

文章はこう始まる。「ちよつと驚きました。日本の奥地は「遊園地」になっていたのである。この夏、若い友人達が白樺湖の奥に連れて行ってくれた時、遅まきながらこの眼で発見したのである」。藤田はそのころ、大学紛争をきつかけに法政大学の教授を辞め、フリーの生活に入っていたから、「若い友人達」とあるのはゼミで教えた卒業生か、あるいはそのころ出入りしていた、みすず書房や庄建設株式会社の社員たちだろうか。研究者の集まりではないような気がする。

当時、日本の各地で工業化や宅地・道路の開発が進み、自然が荒々しく切り開かれていることは、藤田ももちろん知っていた。だがこの一九七八年の夏、長野県の白樺湖畔を訪れて驚いたのは、そこに「完備した豊島園」^{〔注2〕}、後楽園の拡大図が出来上っていた」という事実であった。色とりどりの遊具が並び、水上にはボートが群れをなし、スピーカーが大きな音で流行歌を流している。

実はこの数年後に、高校生だった当方も同じ場所を訪れたことがあるので、その感想はよくわかる。風景の俗悪ぶりに面くらって、友人たちと「シラバカ湖」と呼びあっていた。四十年がすぎたいまは、その場所も観光施設の老朽化が進み、放棄された廃墟建築物をどうするかが地域の課題になっているという。

趙星銀の著書『大衆』と『市民』の戦後思想——藤田省三と松下圭一』(岩波書店、二〇一七年)が論じているように、人間の自由な「遊び」が、保育器のように管理された空間に封じこめられ、変質してしまった。そういう現代社会批判に藤田の言葉は向かっている^①ので、山の風景の変貌に対するイキドオリ^②だけでは尽きない重みがある。しかしやはり、山村部の観光開発を否定し、人間の手がまだふれていない原初の自然への回帰を夢見るような調子があることもたしかだろう。

『富士日記』は、藤田の白樺湖体験の二年前、一九七六年で終わっている。武田泰淳・百合子夫妻が過ごした山梨県鳴沢村の別荘地も、戦争中までは国有の山林だった(『富士日記』一九六五年十月七日。以下、日付のみ略記する)。戦後、一九五九年に富士観光開発株式会社が創業し、翌年から「富士桜高原別荘地」の分譲を始め、武田夫妻もそこに別荘を買って、六四年から住むようになったのである。日記には、富士ラマパーク(現、富士急ハイランド)や富士スバルランド森林公園(現、富士すばるランド)が何度か登場するが、これらも別荘地やゴルフ場の建設と並行しながら開業していった施設である。

時期はやや前後するし、長野県と山梨県の違いがあるとは言え、戦後の高度経済成長期に各地で開発が進んで、山や農村の風景が大きく変わってゆく過程を、藤田省三も武田百合子も見ていた。『富士日記』の場合、藤田のようにその変化を一種のダラク①のように見なし告発する姿勢はない。もちろん藤田は白樺湖を一回通り過ぎただけ、武田夫妻は富士山麓をヒンパンに訪れ、別荘での生活を楽しみにしていたという違いはあるだろう。しかしそこには、武田百合子の観察眼の特色もまた、表われているように思われる。

中央自動車道や森林公園の開設。観光施設を作るために樹海を切り開くブルドーザーの姿(六八年六月十三日)。金色の腕時計をつけ、ダイヤモンドの指輪についておしゃべりをする石工の女衆たち(六五年十月七日)。身近な光景の描写からも、地域の姿が変わり、社会が豊かになってゆくようすが伝わってくる。他方で、農家の「真白な障子」(六八年十一月三十日)や、農耕馬を飼っているらしい馬小屋(同六月十二日)など、昔のままの生活を示すものがまだ広く残っていることも、しばしば描いている。夏の日、買物に行った富士吉田で見た光景は、次のように語られる。

A 暑いので、町の通りを歩いている人は少ない。この辺では肉体労働をする家の人は昼寝をするらしい。裏通りの小道を入ると、開け放った家の暗い奥に、老婆が布のように畳に横になっていたり、子供が三人位ごろんとしていたり、おじさんがタンスによりかかって眼をつぶっていたりする。(七〇年七月二十七日)

武田百合子は「古い家がまだ残っている」とか、「経済成長に取り残された生活」といった書き方をしない。見たようすを淡々と書き綴るのみで、その背景にありそうな事情や社会の変化に対する考察へと離れてゆくことはない。しかし、「開け放った家の暗い奥」や、老婆が「布のように」寝そべっているといった克明な描写から、いかにも古びた家屋と貧しそうな一家のようすがわかる。眼の前の光景から、そうした細部を的確に選んで文章に載せることで、その場の明暗や匂いや埃ほこりつぽさまでが浮き立ってくる。『富士日記』が読者を惹きつける原因の一つは、この描写の魔術にある。

そして、見たものがあるがままに描いてゆく言葉は、ユーモアをたたえながら、奇妙な空気を漂わせている。この引用でも、老婆や子供の姿は、生命をもたない物体のように感じられる。極端に言えば、一家が何かの原因で死んでいるところにソウグウ④したかのような。『富士日記』には時々そうした点景があつて、はつとさせられる。先ほどふれた女衆を含む石工の作業員たちのようすについても、こういう描写がある。

B 工事の人たちは、十時に一回、昼食後に一回、三時に一回、きちんと必ず休憩する。休憩するときには、大きな松の木の根元や軒下に新聞紙を敷いて、真直ぐに仰向けになり、顔に手拭てぬぐいをかけて死体のようになつて全員眠りこける。そして二十分ぐらい経つと急に起きて、いきなり働きたす。(六四年八月十三日)

「十時に一回、昼食後に一回、三時に一回」「二十分ぐらい」といった細かな数字、また「急に起きて、いきなり働きたす」といったところは、人間よりも自動人形を思わせる。さらに「死体のようになつて」眠っているという言葉。これは顔を布で才④才④た姿からくる連想であるが、生きた人間が死んでいるように見えるという語りかたは、やはり異様なものを感じさせる。

反対に、人間のいない風景に人の生活の跡を見いだす箇所も、いくつか挙げることができる。たとえば、留守になつた大岡昇平④の別荘のようす。

乃チ天子自壊ラ之ラ也。

〔資治通鑑〕

〔注〕 1 寵秩―高い地位を特別に与える。 2 区区―わずか。 3 疆―強い。

4 誅―罪のある者に対する討伐。 5 悖―道理に背く。

6 桓文―斉国の桓公と晋国の文公。いずれも春秋時代の有力な諸侯であつた。

問一 傍線部④・⑤の読みを、送り仮名を含めて、すべて平仮名で記せ。なお現代仮名遣いで構わない。

問二 傍線部①を、適切な言葉を補いつつ現代語訳せよ。その際、主語と「許」の内容をはつきりさせること。なお文末の「と」は省略して構わない。

問三 傍線部②を、すべて平仮名で書き下せ。

問四 傍線部③のように、天子自身が礼を破壊したと司馬光が考える理由を説明せよ。

[4]

次の文章は、晋国の大夫でありながら晋国を分割した魏・趙・韓の三氏(三晋)を、周の王(天子)が諸侯として承認したことに對する司馬光の論評である。これを読んで、後の問いに答えよ。(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。)

今、晋大夫暴蔑其君、剖分晋国。天子既不能討、又寵秩之。使列於諸侯。是區區之名分復不能守、而并棄之也。先王之礼、於斯尽矣。或者以為「当是之時、周室微弱、三晋彊盛。雖欲勿許、其可得乎。」是大不然。夫三晋雖彊、苟不顧天下之誅、而犯義侵礼、則不請於天子而自立矣。不請於天子而自立、則為悖逆之臣。天下苟有桓文之君、必奉礼義而征之。今、請於天子、而天子許之。是受天子之命、而為諸侯也。誰得而討之。故三晋之列於諸侯、非三晋之壞礼。

C 人が住んでいない家には、庭にも雨戸やテラスにも、その家の人の息や仕草が漂っているようで、却って人臭く生まなまじい感じがするのは何故かしら。テラスに脱ぎ放してある雨ざらしのゴム草履や、きれいに洗ってつまっている空きびんの箱。外の水道の蛇口につけ忘れたままの水色のゴムホース。髪にひっかかりからないように、垂れてきた枝をビニール紐で束ねてある裏庭の松の木。白樺の枝で作った、坐ったらすぐこわれそうな腰掛け。(六九年十月十九日)

訪問した日の夜か翌日に、情景を思い出しながら書いているはずなのに、その場で写生しているような克明さである。そして一つ一つの物が、使う人の姿や手つきを浮かびあがらせ、それ自体が生きているかのような気配を帯びている。生きている者が死んでいるように見え、生命をもたない物体が命の輝きを放つ。生と死が表裏一体で、何かのきっかけがあれば、いつでも反転して他方の側を見せてくる。そのように感じる想像力を武田百合子はもっていた。

「一度酔ったときにお母さんニヒルだものね」って言ったら、「わかる? そうかもしれない」と言っていた。武田花が語る回想である(村松友視『百合子さんは何色——武田百合子への旅』筑摩書房、一九九四年)。この自己認識は、死を敏感に意識する語りにも通じるものだろう。ニヒリズムと呼ぶこともできるだろうが、それは同時に、人間や動物や自然環境の内に生命のかたまりを掘りあてる感性と共存し、おたがいに支えあっていた。その不思議な関係が、『富士日記』の魅力の奥には働いている。

(刈部直「生と死を見つめる眼」『富士日記を読む』)

(注) 1 『富士日記』作家・武田泰淳の妻である武田百合子が残した日記。山梨県の別荘で家族で過ごした日々が綴られている。

2 豊島園、後樂園——東京都に存在した遊園地。

3 大岡昇平——作家。武田泰淳・百合子夫妻の友人であった。

4 ニヒリズム——虚無主義。

- 問一 傍線部㉗㉘のカタカナを漢字に直せ。
- 問二 傍線部①「好対照をなしている」とあるが、どういうことか。八十字以内で説明せよ。
- 問三 傍線部②「重みがある」とあるが、なぜこう言えるのか。具体的に説明せよ。
- 問四 引用文A・B・Cの関係について、筆者はどのように捉えているか。本文全体の主旨を踏まえてわかりやすく答えよ。

問一 傍線部㉑㉒の意味を現代語で答えよ。

問二 傍線部①「あらまじ」ことにもおぼえけり」とあるが、この時の作者が理想としていたのはどのような人生か、簡潔に説明せよ。

問三 傍線部②「遠きあづまになりて」に関して、作者の父が東国の国司への任官を嘆くのはなぜか、傍線部以下の父の言葉を踏まえて説明せよ。

問四 傍線部③「花紅葉の思ひもみな忘れて」とはどういうことか、本文全体を踏まえて説明せよ。

問五 この作品の作者である菅原孝標女は、藤原道綱母の姪である。この藤原道綱母が、夫との不幸な夫婦生活を中心に記した日記文学の作品名を答えよ。

〔2〕

次の文章は、昭和十四年に発表された、太宰治「番犬談」の一部である。作家の「私」は犬を毛嫌いしていた。しかし、山梨に引越した矢先、ある小犬が家に居着いた。彼はポチと名付けられ、気性のはげしい犬に成長した。東京三鷹にある建設中の家に再度引越しをすることになり、ポチを置き去りにしようとするが皮膚病を発症した。「私」の「家内」は「近所に悪いわ、殺して下さい」と言うのだった。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

「殺すのか？」私は、ぎよつとした。「も少しの我慢じゃないか。」

私たちは、三鷹の家主からの速達を一心に待っていた。七月末には、できるでしょうという家主の言葉であったのだが、七月もそろそろおしまいになりかけて、きょうか明日かと、引越しの荷物もまとめてしまつて待機していたのであったが、なかな通知が来ないのである。問い合わせの手紙を出したりなどしている時に、ポチの皮膚病がはじまつたのである。見れば、見るほど、酸鼻の極である。ポチも、いまは流石に、おのれの醜い姿を恥じている様子で、とかく暗闇の場所を好むようになり、たまに玄関の日当りのいい敷石の上で、ぐったり寝そべっていることがあつても、私が、それを見つけて、

「わあ、ひでえなあ。」と罵倒する^①と、いそいで立ち上つて首を垂れ、閉口したようにこそ縁の下にもぐり込んでしまふのである。

それでも私が外出するときには、どこからともなく足音忍ばせて出て来て、私について来ようとする。こんな化け物みたいなものに、ついて来られて、たまるものか、とその都度、私は、だまつてポチを見つめてやる。あざけりの笑いを口角にまぎまぎと浮べて、なんぼでも、ポチを見つめてやる。これは大へん、ききめがあつた。ポチは、おのれの醜い姿にハツと思ひ当る様子で、首を垂れ、しおしおどこかへ姿を隠す。

「とつても、我慢ができないの。私まで、むず痒かゆくなつて。」家内は、ときどき私に相談する。「なるべく見ないように努めているんだけど、いちど見ちゃったら、もう駄目ね。夢の中にまで出て来るんだもの。」

「まあ、もうすこしの我慢だ。」がまんするより他はないと思つた。たとえ病んでいるとはいつても、相手は一種の猛獣であ

〔注〕

- 1 かやうにそこはかなきことを思ひつづくるを役にて——作者がこれまで、物語などたわいもないことばかりに熱中して過ごしてきたことを指す。
- 2 あらましごと——将来こうありたいという願望。
- 3 親、となりなば——作者の父が立派な官職を得たならば、の意を補つて解する。
- 4 遠きあづま——都から遠い東国の国司のこと。
- 5 胸あくばかりかしづきたてて——娘である作者に、思う存分良い暮らしをさせて、の意。
- 6 人——作者を指す。
- 7 幼かりし時、あづまの国に率て下りてだに——作者の父は、以前作者が幼かつた時にも東国の国司に任ぜられたことがあつた。以下、三行後「心をくだきしに」まで、その時に家族も連れて任国に下つたがゆえに苦労した経験を述べる。
- 8 これ——作者を指す。
- 9 今はまいて、おとなになりたるを率て下りて——この時、作者は二十五歳。以下、作者を連れて任国に下るか否かの迷いと判断を語る。
- 10 永き別れ——二度と会うことの出来ない永遠の別れ。

[3]

次の文章は、『更級日記』の一節である。『更級日記』は、菅原孝標女が晩年に自己の人生を回想して記した日記文学であり、少女時代に抱いた物語へのあこがれが不本意な現実によって次第に打ち砕かれ、最終的に信仰をよりどころとするに至るまでの人生が綴られている。これを読んで、後の問いに答えよ。

かやうにそこはかなきことを思ひつづくるを役にて、物語ものがたりでをわづかにしても、はかばかしく、人のやうならむとも念ぜられず。このごろの世の人は十七八よりこそ経あやよみ、おこなひもすれ、さること思ひかけられず。からうじて思ひよること①は、「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟うきふねの女君をんなぎみのやうに山里に隠し据ゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文のみふみなどを時々待ち見などこそせめ」とばかり思ひつづけ、あらまじ②ことにもおぼえけり。

親③となりなば、いみじうやむごとなくわが身もなりなむなど、ただゆくへなきことをうち思ひ過ぐすに、親からうじて、はるかに遠きあづまになりて、「年④ころは、いつしか思ふやうに近き所になりたらば、まづ胸⑤あくばかりかしづきたてて、率⑥て下りて、海山のけしきも見せ、それをばさるものにて、わが身よりも高うもてなしかしづきてみむとこそ思ひつれ。われも人も宿世⑦のつたなかりければ、ありありてかくはるかなる国になりたり。幼⑧かりし時、あづまの国に率て下りてだに、心地もいささか悪⑨しければ、これをやこの国に見捨ててまどはむとすらむと思ふ。ひとの国のおそろしきにつけても、わが身ひとつならば、安らかならましを、ところせう引き具して、言はまほしきこともえ言はず、せまほしきこともえせずなどあるがわびしうもあるかなと心をくだぎしに、今はまいて、おとなになりたるを率て下りて、わが命も知らず、京のうちにてさすらへむは例のこ⑩と、あづまの国、田舎人いなかびとになりてまどはむ、いみじかるべし。京とても、たのもしう迎へとりてむと思ふ類しるべもなし。さりとて、わづかになりたる国を辞し申すべきにもあらねば、京にとどめて、永ながき別れにてやみぬべきなり。京にも、さるべきさまにもてなしてとどめむとは、思ひよることにもあらず」と、夜昼嘆かるるを聞く心地、花紅葉の思ひもみな忘れて悲しく、いみじく思ひ嘆かるれど、いかがはせむ。

る。下手に触つたら嘔かみつかれる。「明日にでも、三鷹から、返事が来るだろう。引越してしまつたら、それつきりじゃないか。」

三鷹の家主から返事が来た。読んで、がっかりした。雨が降りつづいて壁が乾かず、また人手も不足で、完成までには、もう十日くらいかかる見込み、というのであった。うんざりした。ポチから逃れるためだけでも、早く、引越してしまいたかつたのだ。私は、へんな焦躁感①で、仕事も手につかず、雑誌を読んだり、酒を呑んだりした。ポチの皮膚病は一日一日ひどくなつていつて、私の皮膚も、なんだか、しきりに痒くなつて来た。深夜②、戸外でポチが、ばたばたばた痒さに身悶もたえしている物音に、幾度ぞつとさせられたかわからない。たまらない気がした。いっそ、ひと思いにと、狂暴な発作に駆られることも、しばしばあった。家主からは、更に二十日待て、と手紙が来て、私のごちやごちやの忿懣ひんまんが、たちまち手近のポチに結びついて、こいつあるがために、このように諸事円滑にすすまないのだ、と何もかも悪いことは皆、ポチのせいみたいに考えられ、奇妙にポチを呪咀じゆそし、ある夜、私の寝巻に犬の蚤のみが伝播でんぱされてあることを発見するに及んで、ついにそれまで堪えに堪えてきた怒りが爆発し、私は、ひそかに重大の決意をした。

殺そうと思つたのである。相手は恐るべき猛獣である。常の私だつたら、こんな乱暴な決意は、逆立ちしたつてなし得なかつたところのものであったが、盆地特有の酷暑で、少しへんになっていた矢先であつたし、また、毎日、何もせず、ただぼかんと家主からの速達を待つていて、死ぬほど退屈な日々を送つて、むしろくしゃいらいら、おまけに不眠も手伝つて発狂状態であつたのだから、たまらない。その犬の蚤を発見した夜、ただちに家内をして牛肉の大片を買いに走らせ、私は、薬屋に行きある種の薬品を少量、買い求めた。これで用意はできた。家内は少なからず興奮していた。私たち鬼夫婦は、その夜、鳩首たよりしゆして小声で相談した。

翌あす朝、四時に私は起きた。目覚時計を掛けて置いたのであるが、その鳴り出さぬうちに、眼が覚めてしまった。しらじらと明けていた。肌寒いほどであった。私は竹の皮包をさげて外へ出た。

「おしまいまで見ていないですくお帰りになるといいわ。」家内は玄関の式台に立つて見送り、おち付いていた。

「心得ている。ポチ、来い！」

ポチは尾を振って縁の下から出て来た。

「来い、来い！」私は、さつきと歩き出した。きょうは、あんな、意地悪くポチの姿を見つめるようなことはしないので、ポチも自身の醜さを忘れて、いそいそ私について来た。霧が深い。まちはひっそり眠っている。私は、練兵場へいそいだ。途中、おそろしく大きい赤毛の犬が、ポチに向って猛烈に吠えた。ポチは、れいに依って上品ぶった態度を示し、何を騒いでいるのかね、とでも言いたげな蔑視をちらとその赤毛の犬にくれただけで、さつきとその面前を通過した。赤毛は、卑劣である。無法にもポチの背後から、風のごとく襲いかかり、ポチの寒しげな睾丸をねらった。ポチは、咄嗟にくるりと向きなおったが、ちよつと躊躇し、私の顔色をそつと伺った。

「やれ！」私は大声で命令した。「赤毛は卑怯だ！ 思う存分やれ！」

ゆるしが出たのでポチは、ぶると一つ大きく胸震いして、弾丸のごとく赤犬のふところに飛びこんだ。たちまち、けんけんごうごう、二匹は一つの手毬みたいになって、格闘した。赤毛は、ポチの倍ほど大きい図体をしてしたが、だめであった。ほどなく、きゃんきゃん悲鳴を挙げて敗退した。おまけにポチの皮膚病までうつされたかもわからない。ばかなやつだ。

喧嘩が終って、私は、ほつとした。文字どおり手に汗して眺めていたのである。一時は二匹の犬の格闘に巻きこまれて、私も共に死ぬるような気さえしていた。おれは噛み殺されたついでいいんだ。ポチよ、思う存分、喧嘩をしろ！ と異様に力んでいたのであった。ポチは、逃げて行く赤毛を少し追いかけて、立ちどまって、私の顔色をちらと伺い、急にしよげて、首を垂れすごすご私のほうへ引返して来た。

「よし！ 強いぞ。」ほめてやって私は歩き出し、橋をかたかた渡って、ここはもう練兵場である。

むかしポチは、この練兵場に捨てられた。だからいま、また、この練兵場へ帰って来たのだ。おまえのふるさとで死ぬがよい。

私は立ちどまり、ぼとりと牛肉の大片を私の足もとへ落して、

「ポチ、食べ。」私はポチを見たくなかった。ぼんやりそこに立ったまま、「ポチ、食べ。」

足もとで、べちゃべちゃ食べている音がする。一分たたぬうちに死ぬ筈だ。

私は猫背になって、のろのろ歩いた。霧が深い。ほんのちかくの山が、ぼんやり黒く見えるだけだ。南アルプス連峰も、富士山も、何も見えない。朝露で、下駄がびしょぬれである。私は一そうひどい猫背になって、のろのろ帰途についた。橋を渡り、中学校のまえまで来て、振り向くとポチが、ちゃんとした。面目無げに、首を垂れ、私の視線をそつとそらした。

私も、もう大人である。いたずらな感傷は無かった。すぐ事態を察知した。薬品が効かなかったのだ。うなずいて、もうすでに私は、白紙還元である。家へ帰って、

「だめだよ。薬が効かないのだ。ゆるしてやろうよ。あいつには、罪がなかったんだぜ。芸術家は、もともと弱い者の味方だった筈なんだ。」私は、途中で考えて来たことをそのまま言ってみた。「弱者の友なんだ。芸術家にとって、これが出発で、また最高の目的なんだ。こんな単純なこと、僕は忘れていた。僕だけじゃない。みんなが、忘れてるんだ。僕は、ポチを東京へ連れて行くと思うよ。友達がもしポチの恰好を笑ったら、ぶん殴ってやる。卵あるかい？」

「ええ。」家内は、浮かぬ顔をしていた。

「ポチにやれ、二つあるなら、二つやれ。おまえも我慢しろ。皮膚病なんてのは、すくなおるよ。」

「ええ。」家内は、やはり浮かぬ顔をしていた。

(本文は、筑摩書房『太宰治全集4』によるが、修正した箇所がある)

問一 傍線部㉗㉘の漢字の読みを平仮名で書け。

問二 傍線部㉑の「決意」に至った過程を、「私」はどのように考えているのか、説明せよ。

問三 傍線部㉒とあるが、この記述にあらわれている「私」の気持ちとはどんなものか、それが生じた理由とともに説明せよ。

問四 傍線部㉓の記述がこの文章の中で滑稽であるのはなぜか、説明せよ。